

## Bula Fiji !

沢登 祐子

(18-1, フィジー, 小学校教諭, 練馬区立早宮小学校)

---

フィジーで、体育と音楽と図工を教えていました。今日は拙い発表ですが、最後まで聞いていただけたらと思います。最初に、「フィジーが好きになれそう」ということですが、私は協力隊に本当に行きたくて仕方がなくて、合格した時は嬉しくて、行くのを楽しみにしていたのですが、行く直前になって急に不安になってしまいました。ちょっとホームシックのような状態になってしまったのでしようかなと思ったのですが、フィジーに着いてみると、毎日海とヤシの木に囲まれた生活が待っていて、まずそれに癒されました。それから、交通機関ですが、ほとんどバスで移動していました。本当に子供たちが優しくて、立っていると必ず誰かが席を譲ってくれて、そういう優しさに触れて、だんだんフィジーが好きになっていきました。これはマーケットの様子ですが、タロイモとかバナナとか野菜とかいろいろと売っています。珍しいものがいろいろあって楽しかったり、おばちゃん達とフィジー語で話をすると、おまけをしてくれたり、気さくに話をしてくれて、いい国だなと少しずつ感じていきました。これはラグビーを公園でやっている様子です。本当にラグビー大国で、どこの公園にも、ラグビーのポールが立っていて、練習をしているのが印象的でした。

私は、教育省の、スバプライマリスクールというところで活動しました。もとは政府のものだったのですが、現在はPTAが運営をしている学校でした。その学校は、フィジーの首都にあるということもあり、また、とても予算があり、金銭的に恵まれていて、授業料も高く、はっきり言うとお金持ちの子供たちがたくさん通っているようなところでした。カリキュラムもこの学校だけはフィジーのカリキュラムを使わずに、オーストラリアのものをを使って、どんどん進めていくような学校でした。教職員 18 名、1 年生から 8 年生まで、各学年 1 学級ずつで、担任教員が 8 名という学校でした。1 クラス 40 人ちょっといましたので、授業を教えるのが大変なこともありました。

要請理由は、子供たちに質の高い情操教育を提供する。そして、その教授方法を同僚の教師に伝えるというものでした。具体的業務内容は、1 年生から 8 年生の児童に対し、体育・音楽の授業を担当し、可能であれば、日本文化のことを教えてほしいということでした。最初は、体育・音楽・図工を教えるという要請理由で来たのですが、駒ヶ根にいる時に、音楽はボランティアがほかに見つかったから、教えなくていいですということを聞きました。なので、音楽の教材は持っていかななくていいのだと理解し、体育と図工の準備だけをしてフィジーに行ったところ、やっぱり音楽の先生が来られなくなったから急に教えてくれということを言われ、大変困ったということがありました。

私がいたのは他のボランティアの中でも、授業数が非常に多い学校でした。フィジーの中

では、かなり進んでいる学校で、時間割もきちきちと決まっていた、1年生から8年生の、体育・図工・音楽を全部担当してほしいということで、週に24コマ、この他にも、クラブを少し教えたりしていたので、朝、授業が始まると、さよならするまではほとんど授業が詰まっているという感じでした。

要請理由のところに、指導法を担当や、他の教員に伝えるということがありましたが、最初は自分の授業をやるのに精いっぱい、気が付くと、専科のようになってしまっていて、私が授業をしに行くと、担任の先生たちは出て行ってしまうということがあり、そのあたりでかなり悩みましたが、少しずつ、一緒に授業をしてほしいという話をしていって、できるだけ担任の先生に参加してもらうよう努力しました。でも、やはり先生によって考え方が違っていたので、最初は、全員の先生に協力してほしいということでやっていたのですが、進めていく中で、本当に興味をもってくれる先生に的を絞って授業に参加してもらうということにしていきました。

これは体育の様子ですが、3年生で組体操をしているところです。学校に着いてみると、金銭的には余裕がある学校でしたが、体育の道具が全くなく、あったのはべこべこのボール2つだけだったんですね。だから、何ができるかということ考えたのですが、このように芝生があるので、日本で言ったら、体づくり運動のように、道具を使わずにできる体育に取り組みました。組体操、馬跳び、かけっこ、リレー、それからストレッチなどはやったことがないので、2人組みで押し合うということだけでも、本当に楽しそうにやっていました。ボールをお願いして少し買ってもらい、ボールを使った運動としてはドッジボール、バレーボール、ボール鬼とか、そういうものをしました。フィジーの子はラグビーが本当に得意で、運動神経もよくて、女の子はネットボールというものをよくやっていたが、そういうスポーツは私がいなくてもできるものなので、この子たちがやったことのない運動で楽しめる運動というものを考えました。それから、もうひとつ買ってもらったものが紐ですが、これは便利で、綱引きに使ったり、大縄をしたり、高跳びに使ってみるとか、あと、日本だと石灰を使って線を引きますが、そういうものがないので、ドッジボールをする時に、その紐を線の代わりにして使いました。日本のように鉄棒や跳び箱やマットがなくて、できないこともたくさんありましたが、これはできないあれはできないというのではなく、ある物とある場所で、一つやったものをどんどん発展させていくという形で、なんとか2年間、体育の授業をやっていきました。例えば、馬跳びですが、最初は普通の馬跳びで、その後慣れてきたら2人で馬をくっつけて跳ぶとか、リレーにするとか、そういう風に形を変えて授業をすることができました。

こちらは音楽です。音楽は最初、教材が全くないところからのスタートだったので、JICAオフィスに行ったりだとか、日本大使館に行ったりして教材を集めました。一番役に立ったのが、日本から送ってもらった簡単な英語の歌がたくさん載っている本です。「メリーさんの羊」や、「幸せなら手を叩こう」とか、簡単な英語の歌をたくさん歌いました。でもやはり2年間あるので、そういうことばかりをやってはられないので、これもまた一つの

教材を発展させていくような形で、輪唱にしたり、合唱にしたりしていきました。とても便利だったのが、インターネットで検索した英語の歌の歌詞が出ているサイトです。もともとは英語の歌で、日本語の童謡になっているものがたくさんあったので、たとえば「大きな古時計」とか、「線路は続くよどこまでも」などですが、英語の歌詞を調べて、歌ったりしました。子供たちは、「大きな古時計」と、「カントリーロード」が大好きでした。高学年、7・8年生になると、日本では中学生なので、「きらきら星」などを歌っているわけにはいけないので、ディズニー映画の曲だとか、アバやビートルズの曲だとか、そういう少し年上の人たちも興味を持つような曲を使ってやりました。

図工もやはり、材料がなかなか手に入らないということがありました。手に入った物が、このような色画用紙と絵具だったので、これらを駆使していろいろなことをやりました。これは、色画用紙をくしゃくしゃにすると和紙のように柔らかくなるので、クッションを作ったときの写真です。余った茶色の色画用紙を木の幹のようにして、絵具で葉を描くということもしました。いつも、あるものを使ってやっていました。また、新聞紙だけはたくさんあったので、新聞紙を使って動物を作って、その上に絵具を塗るとか、そういうこともやりました。日本の図工の専科の先生にアドバイスしてもらったことがとても役に立ちました。私は図工をほとんど教えたことがなかったので、どうすればいいかを相談したのですが、子供たちは作って遊べるものが大好きだよということを聞いたので、まずはそういうもので興味を持ってもらいたいと考え、フリスビーや独楽などを作りました。

最後、これは2008年、去年の1月から3月の写真ですが、どうしてもやりたかったことの1つである、巡回指導の様子です。スバプライマリスクールは本当に恵まれていて、この子たちに教えることも意味があることだと思いましたが、図工を一回もやったことのない子供たちがいる学校がたくさんあるので、そういう学校でぜひ教えたいと頼み、やらせてもらいました。最初はなかなかOKがでなくて、交渉が成立するのに半年くらいかかりましたが、教育省の上のほうの方に賛同していただいて、月曜日から木曜日まではスバプライマリーで授業、金曜日は他の学校を回ることになりました。4日間で24コマの授業をやり、その後に巡回指導の準備をして、金曜日は材料などを全部持って他の学校を回りました。大変でしたが、本当にいろいろな子供たちや先生達に会えて、とてもいい経験になりました。

他のJOCVと協力して行った活動もたくさんあります。自分ひとりでできることには限りがある、やはり協力して活動ができると、こんなことができるのかということがたくさんありました。その一つがアート展です。これはスバに小学校教諭のJOCVが全員集まって、企画をして、現地の学校30校くらいに参加してもらったものです。この時に私たちがアートブックというものを配りました。アートブックには、いろいろな図工作品の作り方が載っているんですね。私が赴任したちょっと前の隊員が作っていて、できていたんですね。これを持って、いろいろな学校を回って、図工展があるので作品を出してみませんかということを言って回りました。帰国するときには、2年間でいろんな作品を作ったの

で、それも形で残したいと考え、2冊目のアートブックを作り始めました。私たちが帰るまでには作り終わりませんでしたが、後は次の隊員に任せて、今は2冊目の製作が進行中というところです。

最後に、「ケレゲレ(お願い)」というお願いに悩まされた話をします。フィジーは村文化なので、どうしてもみんなでやっていくっていうのがありました。これは私が住んでいた家の隣というか、一緒に敷地に住んでいた人なんですけれども、何かというと「ケレゲレ」とやって来て、「ケレケレ、貸して」とか「ケレケレ牛乳貸して」とか言うんです。私もいい関係を作っていくので「いいよ」と言うのですが、それがどんどん、エスカレートしていった、「お金貸して」とか、そういう風になっていくのです。学校でも同じで、図工で使う色画用紙なんかも、大分自分のお金で買った部分もあるのですが、それを他の人達がどんどん借りに来るのです。1回2回ならいいのですが、なくなってしまうので、私もどうしようかなって悩んでしまいました。それで、ある時自分も、ケレゲレしてみようと思って、他の先生に「ケレケレ、絵の具貸して」と言って見たのです。そうしたらその先生がすごい笑顔で「いいわよ、いいわよ、どんどん使って」と感じて、私にボンって貸してくれて、それで、それまでケレゲレって言われることが大嫌いだったのですが、自分で言ってみると、あ、こうやって、みんな助け合って生活してるんだなっていうことがわかって、最初が一番嫌いだったケレゲレでしたが、その中から、あるものはみんなで使っていくというような、生き方を、学びました。

最後、日本に戻ってきてからですが、4年生の総合で、国際理解協力で少し取り組んでみました。その結果、国際理解教育の難しさというか、上手く進めていくためには、同僚の先生と、協力していく、理解してもらっていくということが大事だと思いました。今回、フィジー大使館の方に2名来てもらって、子ども達に話をしてもらったり、一緒に歌を歌ったりすることができましたが、その来てくださった方が、「時々踊りを教えにきてもいいよ」ということを言うてくださったので、「あ、やりたい」と思ったのですが、なかなか一緒に組んでいる先生の理解が得られなくて、結局は実現しなくて難しいと思いました。それから子ども達全員が興味を持つかということ、そうではなくて、なぜ援助が必要なのかという少し難しい話になってくると、4年生なので、分からなくなってしまうたり、ちょっとつまらなさそうにしている風に見える子もいたりして、難しいなと感じました。それでも、広く子ども達を見ていると、何人かの子ども達は確実に目を輝かせて話を聞いていて、これでいいのかもしれない。この中で、一人の子どもでも真剣に受け止めて何かに気がついてくればよしとして進めていこうと思っています。

最後に、2年間活動して、私は国際人という人はどういう人だろうとずっと考えていましたが、活動を通して、人間関係を築いていける人、簡単にいうと誰とでも友達を作れる人というのが国際人ではないかと思いました。本当に語学だとか、持っている知識というものではなくて、相手を思いやって、分かろうとする気持ちをもって人間関係を作っていける人が、本当の国際人だっている風になんか今は考えています。ですから、日本の教育活動の

中でも、そういう子ども達を育てていきたいし、その中で時々このような話をして、海外に目を向けさせていければと思っています。ありがとうございました。